

猪狩いかり

桜崎
緒斗子

剛は端正な顔立ちをした長身で、街を歩けば人気の若手俳優に間違われるような青年であった。大学時代にベンチャー企業を立ち上げ、スポーツカーを何台か所有している。剛と佑香は結婚してから、子供たちと品川のタワーマンションに暮らしていた。

桜もそろそろ終わるかという暖かい日に、佑香は数少ない友人の恵理子と目黒川沿のカフェにいた。佑香が北海道の実家を離れ東京の大学に進学した時からの付き合いで、二人とも敬虔なクリスチャンの家庭で育ったことから意気投合した。

「私、このままのペースで産んだら何人家族になっちゃうの」佑香が言った。佑香はつい

先日三人目を妊娠したことがわかったのだ。結婚して三年目で三人目を妊娠したというのはいささかペースが早い。25歳で子供が三人というのは昔は決して珍しくはなかったのだろうけれど。

「旦那さんは経済力もあるし賑やかでいいじゃない。子供は三人の予定？」恵理子が言った。「上が二人女の子だから、男の子が生まれたら私はもう十分かな。二人だけでも死ぬほど大変だし」と佑香は言った。

実は佑香には少し気がかりなことがあった。剛から求められるままに性交に応じてきたという部分が大きいのだ。さらにこの夫婦は避妊をしたことがない。結婚したばかりの時はそれで良かったのかもしれない。お金の心配はない、子供たちはすくすくと育っている。ただ三人目を妊娠したこの時、佑香は不安な気持ち湧き上がってくるのを感じていた。

その夜、佑香は剛と話した。

「私、最近一人になると不安な時があるの。子供たち二人を育てながら、もう一人お腹の中にいるって結構大変なの。もう少し早く帰ってきてもらったりできないかな」

「それは難しいよ。俺の役割は仕事でしょ。佑香や子供達に苦労させないようにしてるつもりなんだけどな」

「それはわかってる。時々少し子供たちを見てくれるだけでいいの」

「ごめん。今は仕事の勝負時だから厳しい」

「そうだよね。わかった。もう少し頑張ってみる」

佑香は10カ月後に無事三人目の男児を出産した。男の子が生まれ、もうこれで十分と自分のなかで一つの区切りがついた感覚があった。

しかし、それは佑香の希望にすぎなかった。出産直後から剛は家に帰ってくると佑香の体調や時間などを気にせず性交を求めてくる。酒に酔って午前二時を回ってから帰ってきた剛の要求に応じるようなことも多かった。佑香にはそれが妻の責任のように感じてしまふ節があった。もともと佑香はあまり人に強く自己主張をする性格ではない。それをいいことに剛の当たりは徐々に強くなり、二人の間に力関係が生じていった。一年が過ぎた頃皮肉にも四人目を妊娠したことがわかった。

「今日産婦人科に行ってきた」佑香が言った。

「どうだった？」剛が言った。

「やっぱりいるって」佑香が言い、それからしばらくの沈黙があった後、

「今回は産むのはやめておこう」と剛が言った。

「え、どうして？」剛は当たり前のように産むことを選ぶと思っていた佑香は拍子抜けした。

「いや、ちょっと佑香も大変そうだし…」

「中絶するってこと？」

「そうだね…」

結局、何日か話し合った結果、頑なに剛が望んだこともあって出産をあきらめることにした。産婦人科で手術をした後、佑香はいたたまれない思いと同時に、これ以上子供を産まなくて良いような解放されたような感じを持った。

ところがそれから一週間ほどした頃、恵理子から突然電話がかかってきた。

「さつき、旦那さんの車を見たよ。助手席に若い女の子が乗っていて、何だか親密な感じだったけど佑香は知ってる？」

「え？全然知らない」佑香には寝耳に水だった。

「確かに旦那さんだったと思う。私の考えすぎかなと思ったんだけど、心配になったから一応伝えておくね」恵理子が言った。

「うん。ありがとう」佑香は胸騒ぎを抑えられず、電話を切った後すぐに剛に電話した。

剛は電話に出なかったが、その日は比較的早い時間に帰ってきた。

「ごめん。朝から忙しくて電話に出られなかった」

「今日女の子と会ったりしてた？」

「いや、何で？」そう言ったが、まるで警察の取り調べのように淡々と尋問する佑香に対して、剛は意外にも比較的早い段階で白状した。

「正直に話すと実はその人に子供ができたんだ。佑香に話さなければいけないとは思ってたんだけど」剛が言った。

さらに家には迷惑をかけないから責任を取って認知したいと言うのだ。それを聞いた佑香の頭の中は真っ白になった。その後二人がどんな話をしたのかすらほとんど覚えていないほどであった。

当然の事ながら離婚という選択肢は佑香の頭には浮かんだ。しかし同時に、いま離婚したら生活していけないとも思った。三人の子供たちに苦しい思いをさせることになる。完全に剛の経済力に依存している自分を情けなく感じた。何しろ剛の年収はざっと数千万円はあり、使えるお金も平均的な家庭よりははるかに多い方なのだ。それ以外に自らが立ち上げた会社の株式を保有している。もし会社が上場するようなことがあったら、確実に成功者としての生活は約束されるだろう。離婚したところで、それほど経済力と可能性を持つ男性とこの先三人の子供を連れた自分が結婚することは難しい。かなりの美人である佑香でもそう思えた。それなりにプライドを持って生きてきた佑香には、経済力さえあればある程度のことを許容できることもわかっている。剛が離婚したいなどと言い出さないうちに、波風を立てないように佑香は自分の側が折れることが得策との結論に落ち着いた。

その後しばらくしてから、剛から助手席の女が流産したことを聞いた。この時佑香は悪いことは続かないものだと思って少し安心した。また剛が反省しているように見えたことも佑香の気持ちを慰めるのに役立った。佑香は剛の過ちを許し、目の前にいる夫と愛し合う喜びに目を向けることにした。そのような中で佑香に妊娠が発覚した。その後四人目の男児が生まれ、佑香はそれをきっかけにして新しく家族のあり方を作っていけたらと希望を抱いていた。

一方でこんな中でも佑香を悩ませたことがある。それは、妊娠中や出産後の身体が完全に回復してるとはいえない状況でも剛が性交を求めてくることであった。また剛は相変わらず避妊をしようとしめない。佑香がその要求を拒むと剛は不機嫌になり暴言を吐いたりするのだ。佑香は密かに自身で避妊しようと思ったが、それが剛にわかった時に暴力がエスカレートするのではないかという心配からそうしなかった。本当のところは抵抗する気力が残っていなかったといった方が正しいのかもしれない。

そんな生活が続ける間に、剛と佑香の間にできあがった上下関係は揺るがぬものとなっていた。佑香は剛に支配された状態になった。そして仕事でストレスを抱えている時などに剛は佑香に殴る蹴るの身体的暴力を振るうようになった。しかし、暴力を振るった後、剛は妙に優しくなる。心から謝られもう二度とそのようなことはしないと誓うような具合に約束をするのだ。そして謝罪後の儀式として決まって性交に至る。その時だけは佑香はまだ自分を愛してくれている、子供が自分と夫とを繋げてくれると思うのだった。「もう

一人生まれれば剛が優しくなるかもしれない」と自分に言い聞かせるように淡い期待を抱くのだ。もう一人生まれてくれば、きっと状況が変わってくれるのだと。そして一年後には五人目となる女兒を出産した。

家庭内暴力がエスカレートすると同時に、不思議なほどに周りの人との付き合いがなくなっていった。元々付き合いの薄い遠方に暮らす互いの両親はもちろん、数少ない友人の恵理子に最後に会ったのがいつだったのかも佑香には思い出せないほどであった。四人目を産んだ後くらいだっただろうか。「相談に乗るから何でも話して」と恵理子に妙に心配されたことが記憶に残っていた。その時、佑香はまだ自分の力で何とかできると思っていたこともあり話すことはしなかったが、もしかすると恵理子は佑香の手や足にできた痣や傷に気付いていたのかもしれない。

もちろん自分でも29歳で五人目を出産する女性がそれほど多くないことは十分すぎるほどわかっていった。しかし、暴力は容赦なく佑香の中から選択の自由を奪い去り、もはや自分の意思で出産しているとも言えない状態だった。生活の全てにおいて佑香は常に剛の暴力に怯え、自分の意思を介在させることができなくなっていた。佑香は自分の身体のどこかが既に深刻な病に冒されていて、近い将来病死してしまうのだという気さえした。実際に精神は完全に病んでいた。精神科にいけば確実に何らかの診断を受け、子供と引き離されてしまうかもしれない。自分が死んだとしても誰にも本当のことはわからない。剛はきっと妻を病気でなくした哀れな夫と見られるのである。剛はきっとそれさえも自分のプラスに変えてしまうだろう。それで人を巻き込んで生きてきたような人なのだから。もしかしたら、剛は他人の心を自分の養分にして生きている悪魔なのかもしれない。そして自分は悪魔の養分となるだけの存在かもしれないとも思った。佑香の目は輝きを失い、ただ一日をやり過ごすことしかできなくなった。

それから半年ほどたったある夜、深夜に警察から一本の電話がかかってきた。剛が覚醒剤所持の現行犯で逮捕されたというのだ。佑香は何かの間違いではないかと思ったが、警察の話によると剛は覚醒剤だけでなく不法なビジネスにも手を出していたようで、社会的勢力との付き合いがあり捜査対象となっていたとのことだった。詐欺容疑での捜査も同時に進んでおり、近く立件される見通しだという。

佑香は完全に自分の無知さを後悔したが既に遅すぎた。何しろ五人の子供の命を預かっているのだ。剛が逮捕されてから段々と自分を責めるようになっていった。私がつとしたりしていればこんなことにならなかつたのかもしれない。あまりにも重すぎる十字架を背負ってしまった。佑香は深い後悔の念に苛まれた。それから、何日も何日も佑香は悔やみ続けた。この先どうなってしまうか全く予想もできなかった。ただ剛がいなければ生活していくことができないことは明白だと思った。

ある時から佑香はこの苦しみから解放されたいと一心に願うようになっていった。愛する子供達のこと頭にはよぎった。それよりも、今自分が息をしていることの方が苦しかった。もう自分にはなんの力もない。人間の尊厳の全てを失い、ひとかけらの希望さえも失ってしまった。自分の全てを悔いることはできたが、それを改める気力は佑香にはもう残っていないかった。

その頃から佑香は、自分が魚になり冷たい水の中を泳ぐ同じ夢を何度も繰り返し見るようになった。同じ夢を見る度に水の中に飛び込めば魚になれるのだとの確信を強めていった。人は母親の胎内で人の進化を辿るのだという。人はほんの小さな細胞から始まり、水の中で魚のような形になる。少しずつ手や足が形作られていく。その昔、人は水の中で暮らしていたのだ。

ある晩、子供たちが寝静まった頃に佑香は家を出た。ほんのひととき、魚になることにしたので。足取りは驚くほど軽く気づけば晴海運河にかかる大きな橋の中央にいた。佑香は柵から身を乗りだして下を覗き込んだ。水面までは軽く20メートルはありそうだった。レインボーブリッジの向こうに船の灯りが見える。おそらく東京湾に向かっていているのだろう。時々車道を車が走るが、大きな鉄柱が死角になり佑香からは時折車のヘッドライトの明かりが見えるだけだった。佑香は柵を乗り越えた。水面のうねりを見ようと真下を覗き込んだが、水面は黒すぎるほど黒いブラックホールのようなであった。佑香は今度は上を向き目を閉じて両手を広げた。佑香の身体は11月の終わりの強く冷たい向かい風に溶けてしまいうさだだった。少し重心を前に倒すと風が押し返して来るような気がした。佑香は風との対話を楽しんだ。

その時「ちょっと待ってください」と叫ぶような声が聞こえた。気のせいかと思つたが、ふと我に返ると柵の向こう側にグレーのコートを着た女性が立っているのが見えた。いかにも会社帰りと言う格好の女性であつた。その女性の大きな声に驚いた佐香は身動きができなかつた。

「いま、そつちに行きます。絶対に飛び降りないでくださいね」

女性は佐香のところまで来ると柵を挟んで佐香の体を抱き寄せ少しの間そうしていた。佐香には何が起こつたのか理解できなかつた。しばらくして女性は佐香を抱きかかえ柵のこちら側へと連れ戻した。

「本当に良かった。飛び降りないでくれて」どこの誰かも知らない女性だつたが妙に頼れる印象があつた。

「ここまで来てしまったあなたはきっと深く傷付いているのでしようね。よかつたら少しお話を聞かせてもらえませんか」

「何を話せばいいんでしょうか。話せるようなことは何も…」佐香が言つた。

「誰かご家族とか、相談できる人はいますか。私が代わりに連絡しますよ」

「いません。私は何をしようとしていたのでしょうか。頭がぼんやりしてしまつて…」

「そうですか。私は仕事でいつも人の相談に乗っています。私は猪狩いかと言います。仕事で慣れていますので、どんな話をされてもおそらく驚くことはないと思います。私でよければどんなお話でも聞きます。もちろん絶対に誰にも話しませんし、それはいつもの仕事と同じことです」

それを聞くと佐香はこの人だつたら大丈夫かもしれないというような安心感を覚えた。そんな佐香の肩を猪狩はまた抱き寄せた。佐香の目から涙がこぼれ落ちた。泣いたのは久しぶりな気がした。気づけば次から次へと涙がこぼれ落ちてくる。一通り泣いた後、佐香は猪狩に洗いざらい話をした。何しろ橋から飛び降りるつもりだつたのだから、佐香にとつて話せないことなどもはや何もなかつた。ほとんど思い出せることはすべて話した。話したあとは驚くほど心が軽くなつた気がした。心に何重にも巻きついていていた重く冷たい鎖が外れていくような心地の良い感じであつた。何年かかけて少しずつ奇妙な地底の世界、もしくは死者の国のようなところに迷い込んでいたのではないかと思えてきた。

「お話ししてくださつてありがとうございます。あなたは大きな問題をご自身で抱え込んでしまつているようですが、実はあなたのような方つてたくさんいらっしゃるんですよ」猪狩は言つた。

「私みたいな人が？」

「佑香さんは慈愛に溢れた方だと思えます。そんな性格も悪いことばかりではないと思いますが、佑香さんのような方はご自身への愛を忘れてしまいがちなんです」猪狩が言った。「気づけばたくさんのものを背負ってしまっていました。出産って本当に苦しいはずなのに、どうしてまた二人目、三人目を産んでしまったのがわからないんです。妻としてできる限りのことをしようと思っただけを考えてきました」佑香が言った。

「子供を産んだ母親は、一人の人間が世に生まれ出た喜びのためにその苦痛を思い出さないそうですよ」猪狩が言った。

佑香ははっと何かに気づかされた。夢から覚めたような感じだった。五人の子供達のことだった。なんということをしたんだろう。急に子供達のが心配になった。佑香が我に返ったのを待っていたのはむしろ猪狩の方のようだった。自分がいなければ子供たちは死んでしまうかもしれないのだ。

「私、戻らなきゃ」

「早く戻ってあげてください。それから、佑香さんは自分の思うように、好きなように生きてください。佑香さんが失われた尊厳を取り戻してください。ださることを願っています」猪狩

は言った。

「はい。本当にありがとうございます。私、子供達のところに戻ります」そういうと佑香は全力で走り出した。走りながら佑香は突然目の前が開けたと同時に自分の中に大きな力が湧き上がってくるのを感じた。家に帰ると、子供たちは何事もなかったかのように眠っていた。一人一人子供達の寝顔を見ていくと、なぜ魚になろうなどと考えたのが信じられなくなり涙がこぼれ落ちた。

翌日は朝から雨だった。その日は勾留中の剛の接見に行くことになっていた。着替えて持つて行き、これからのことを話すのだ。通常ガラス越しに交わされるのは自由を奪われた男と身元引き受け人の女の義務的な内容の話である。

「申し訳ない…」剛は言った。

「ううん。私たち家族だから」佑香は言った。

「佑香に頼みたいことがある。まず弁護士費用の支払いも含め、俺の弁護士とやりとりをしてほしい」剛は言った。

「わかった」佑香は応えた。

「それから俺の資産の管理を頼みたい」と言った。

この時、剛の資産状況を細かく聞いた。剛は誰に聞かれてもいいような、夫婦にしかわからない言葉を使ったりしてそれを伝えた。暗に公にできないような金を隠せと言っているようだ。佑香は思ったが何も聞かなかった。剛の話によって佑香の知らなかったまとまった額の資産があることがわかった。剛が自らの資産を開示したのは、おそらくまな板の鯉となった剛にとって一番信用できるのが佑香だったからだろう。

警察署を出たのは午後三時頃であった。朝から降っていた雨がやみ、ふと目線を上げると驚くほど澄んだ青空に虹がかかっていた。そう言えば虹は太陽に背を向けた時にしか見えならしい。雨上がりの虹を見て自分は前を向けることを確信した。「私は大丈夫」佑香は自分にそう言い聞かせて家路を急いだ。

複数の剛の銀行口座には約七億円近くの資産があることがわかった。その夜、佑香は魚になろうとしたあの夜のことを思い出した。猪狩の言った失われた尊厳とは何を意味しているのだろうか。佑香はその翌日から数日かけて思い立ったように、剛の口座から半分の資産を自分の銀行口座に移動させた。半分を残したのは、剛の尊厳にまで踏み込めないと思っただから。

それから何回かの公判を経て、剛は詐欺罪で懲役三年六か月の実刑判決を受けた。それを理由にして佑香は剛に獄中離婚を求めた。当初は納得しなかった剛であったが、しばらくしてから離婚を受け入れた。自由を失い、なす術のないことを悟ったようであった。意外なことに親権や財産分与などについても、剛はそれまでのような自己本位な主張をしなかった。剛の弁護士の話によると、彼は刑務所の中で般若の顔をした女に殺される夢を繰り返し見るのだという。男にとって最も怖いのは女の怨念だと聞いた事がある。この世で最も恐ろしいものの対価としては、むしろ剛にとっては安すぎたくらいかもしれない。

離婚してからの佑香には、まるで悪夢から覚めたかのように、あつという間に活力が戻った。自由がもたらす生命力は驚くべきものだ。そして佑香は離婚という経験から、自らの手で幸せを掴み取ることができることを悟った。

今日、佑香は甘く苦い記憶の詰まった品川のマンションを出ていく。子供達を連れて剛

の知らない遠い街に移り住んで一からやり直すことにしたのだ。剛の顔を見ることは二度とないかもしれない。それでも剛には本当の自由の意味を知ってくれことを願った。愛する子供達の父親であり、いつか一緒に未来を夢見た人なのだから。

「ママ、早くー」新しい旅立への期待に胸を膨らませて先に部屋を飛び出した子供達が佑香を呼ぶ。佑香と子供達の旅立ちを祝福するように、思い出の詰まった部屋には春の始まりを告げる日差しが優しく差し込んでいた。